

# 文化

## ▼水の精／水の神

わたしたちは、誰知れず語り継がれてきた物語のなかで、多くの精霊や妖精に出会うことがある。洋の東西を問わず、そこにはちょっと懐かしくも悲しいエピソードが秘められている。たりもする。

泉鏡花が、登張竹風と共に訳したハウプトマンの戯曲『沈鐘(春陽堂)』他に阿部六郎訳・岩波文庫には、ラウンテンデラインと名付く少女の妖精が出てくる。同じくドイツの作家フーゲーが描く『水妖記(岩波文庫)』には、ウンディーネと呼ばれるニンフが現れる。訳者の柴田治三郎は、「古代ギリシア人の考えたニンフは、木や山や森の精でもあるが、とりわけ水の精であり、神々のように不死ではないが……そのような物の精に関する信仰は、人間の心のなかにずっと生きつづけてきた」(「あとがき」)と記している。

わたしたちに身近な水の神は、産育の神であり、水難を除いて豊穡(ほうじょう)をもたらすことから女神や母子神として崇(あが)められてきた。

## ▼罔象女神

『古事記』によれば、イサナキ、イザナミはさまざまな神を生んだが、火の神ホノヤギハヤオ(ホノカグツチ)、鉾山の神カヤマビコ・カナヤマヒメに次いで生まれたのが、ミツ

# 民俗通信

## なら



大正11(1922)年5月、英国皇太子に春日社を案内する森口奈良吉(神主姿)



「大英博物館「NARA」展で展示された「木造罔象女神坐像(丹生川上神社蔵)」

## 旅する女神

ハノメ・ワコムスビ・トヨウケヒメという灌漑(かんがい)・生産・食物をつかさどる神々であったという。

えている(二〇一九・一〇・五)。出版されているのは、法隆寺の観音菩薩立像、東大寺の誕生釈迦立像及び灌漑(かん)

また、『日本書紀』(巻一の二書・第三)には、伊弉冉尊(イサナミ)は火産靈(ホムスビ)を生んだために焼死(やけど)したとする時に「水神罔象女(ミツハノメ)、及び土神埴山姫(ハニヤマヒメ)を生み、また天吉葛(アメノヨサツラ)を生みたまふ」と記されている。ミツハノメの罔象(みづがま)は水神、または水中の怪物。『淮南子(えなんじ)』「中国、前漢時代の論集」の注に「水之精也」とある(『日本書紀(一)』、岩波文庫)。

さて、その水の神が大和吉野の地から、はるばる英国へ出立になった。

## ▼大英博物館へ

ちょうど同地に滞在していた筆者(西村)は、英国西南部の都市バースからGW(グレートウエスタン鉄道)と地下

# 奈良吉の思い、届けに

「大英博物館」を聞いたとしたら、どんなに驚いたことであろう」と書いている(森口奈良吉と吉野離宮)。今回のわたし自身の旅もまた、森口奈良吉の強い執念のようなものに引かれてやって来たような思いがする。

奈良吉の年譜には、「一九二二(大正一一)年一月、神社調査会総会において(にしむらひろみ 詩人・奈良民俗文化研究所研究員) 次回回は6月6日付」

鉄を乗り継いでロンドンへ。大英博物館への道も、二時間とからなかった。博物館の「日本ギャラリー」ルーム93に、木造罔象女神坐像と木造女神坐像(いすれも丹生川上神社蔵)の二躯(く)は、それぞれガラスケースに収められて隣り合わせにあった。

「奈良真史」に、東吉野村の丹生川上神社(中社)は、①小牟漏岳(おむろだけ)の山麓、御手洗(みたら)川を距(へだ)てて丹生峯(にぶね)に対する広い段丘上に鎮座すること。②高見山、日高川、四郷(しごう)川の合流点にあり、水の神にふさわしい立地にあること。③古来祈雨(あまごい)に黒馬、止雨には白馬を献(けん)じる風があったこと。④歴代天皇がしばしば行幸し、大宮人も蟻(あまごい)の通うように訪れたことなどを記しているが(神社編/民俗編・下)、いまや奈良吉が主唱した「丹生川上離宮説」は空しく忘れられた感がある。

もう一枚の珍しい写真のことを紹介して、この項を閉じよう。一九二二年五月、当時春日神社(現・春日大社)の瀬垣(せがき)であった奈良吉は、参拝に訪れた英国皇太子(後の国王エドワード八世・一八九四〜一九七二)を案内する写真を残している。丹生川上の水の神、罔象女神は、テムズの川をも潜(ひそ)って遠い英国の地へ、奈良吉の熱い思いを届けに行つたのかも知れない。そう、いまから、ちょうど二〇〇年ほど前に、奈良吉が思い描いていた夢を。

次回回は6月6日付